

### 第3節 新庄から全国へ—NPO法人AMPの取り組み—

渡辺 ひかり

#### 1. 新庄市とは

私が調査している新庄市は山形県の北部に位置する、人口約4万人のとても大都市とは呼べない地域だ。新庄市では年々高齢化が進み、人口も減っている。若い世代が就職や進学などで他県に出て行ってしまい、そのまま結婚し新庄市に戻ってこないというのが大きな理由である。私は卒業後、地元である新庄市に戻り就職したいと考えているが、友達で地元に戻りたいと言う人はほとんどいない。そこで、私と同年代の若い世代の人々が将来新庄市に戻ってきたいと思える魅力はないのだろうかと考えた。また、定住に限らず少しでも人が増えてほしい、たくさんの人に新庄市を知ってほしいと思い、まずは人の出入りがわかる観光について調査をすることにした。

しかし調べてみてわかったことは、観光目的で新庄市を訪れる人は年間を通してとても少ないということだった。1年の中で新庄まつりが行われる夏の3日間だけは人が多く出入りするが、それ以外で特に目立った観光スポットもない新庄市を訪れる人は多くなかった。そのため新庄市も、観光といえば新庄まつりというように、まつりを前面に押し出しアピールしている。

しかし演習の発表の場で分かったことは、新庄まつりの知名度の低さであった。あれだけ、「観光と言えばまつり」と市が押し出しているにもかかわらず、同じ県内の人すら知られていないというのが現状であった。また近隣の県で同じようなまつりがいくつも行われており、同じような内容のまつりであるのに、新庄まつりよりも集客数は何倍も多いことがわかった。このことから、まつりを観光のメインとして多くの人を集めたいと願う新庄市と、同じようなまつりで何倍もの人が集まる市では何が違うのかということに興味を持った。またまつりではなく目的は何であれ、人が多く集まる場所ではどのような取り組みがなされていて、新庄市との違いはどのようなものかという疑問が生まれた。

このようなことを考え調査していく中で、新庄市のNPO法人AMPという団体の存在を知った。この団体は新庄市に活気を取り戻す目的で活動している。観光の取り組みにも力をいれているこの団体に興味がわき、AMPについて深く調査をすることにした。

#### 2. NPO法人AMP

AMP(アンプ)とは2003年に新庄市で誕生した団体で、主に町の活性化活動を行う特定非営利活動法人だ。活気と魅力あふれる地域社会づくりを目指して活動をしている。その活動を行いたいと考えている団体または個人の意思や活動を増幅し現実のものにすることで、また独自に様々なイベント事業を展開することにより活性化を目指している。いろいろな人の希望や夢を膨らませ、それを実現する手助けができるようにと願い、「増幅器」を意味する「Amplifier」から名付けられた。

私は18年間新庄市で過ごしていたが、AMPの存在を知ったのは初めてだった。新庄市に活気を取り戻そうという強い意志を持つ団体が、自分の知らないところで活動しているのだと知り、とても感動した。

AMPは日々様々な活動をしていた。たとえば中心商店街資源回収プロジェクト「ちょべっと」だ。「ちょべっと」とは新庄市の方言で「少し」を意味する。商店街にある資源回

取店に紙類や缶類を持っていくと、重量に応じてポイントが付く。100ポイント=100ちよぺっととして商店街の各店で、貯めたポイントを使うことができるのだ。このプロジェクトにより家庭も企業も商店街も、新庄市に住む人みんなが「ちよぺっと」ずつ得をする。リサイクルの促進と商店街の活性化がつながっている素晴らしい取り組みだと評価され、環境省主催の「ストップ温暖化1村1品大作戦」の全国大会で優秀賞を受賞した。

また「トナカイ急便」の取り組みもとても興味深い。これは地域の子供たちに夢を与えるプロジェクトだ。クリスマスに親から預かったプレゼントを、AMPのスタッフがトナカイに変装し子どもたちに届ける。新庄市に住む子どもたちの喜ぶ顔が見たいという思いで始まったこのプロジェクトは、トナカイ急便を利用した親たちから高い評価を受けている。

また新庄市内のお店で行われている「人替わりランチ七色」。「日替わり」ではなく「人替わり」なのがポイントだ。これはその名の通り毎日作る人が替わるため、お客さんは毎日違う味を楽しめるのはもちろん、シェフが替わることによって異なる雰囲気を楽しむこともできる。また様々な人と人との出会いも生まれる。

また今では全国に広がった「100円商店街」はAMPが最初に行った活動だ。新庄市には駅前に商店街が並んでいる。だがほとんどが空き店舗や閉店寸前の店舗で、休日でも全くと言っていいほど人がいない。近くにスーパーなどがあり、商店街を利用する人がいなくなってしまうためだ。そんな人通りのない商店街を見つめていたある一人のスタッフの言葉がきっかけで、100円商店街は誕生した。最初はワゴンセールで、店頭にワゴンを並べセールを行っていた。だがそれでもお客さんの数はあまり増えなかった。そこで思い切って商品を全部100円で売ろうと企画し、実際にやってみたところ大成功した。今年で10年目となる100円商店街は今では年に4回行われ、先月6月で50回目の開催であった。AMPが始めたこの企画は、今では全国60を超える自治体に広がり、経済産業省の「がんばる商店街77選」にも選ばれた。この100円商店街を通して、少しずつではあるが商店街を利用する人が増えたようだ。またお客さんだけでなく、空き店舗を利用して新しくお店を出す人も増えた。このように単発的に何かをするのではなく継続して長く続けることで、徐々に効果が見られるのだと思った。

1

### 3. 現地調査を経て

AMPを調査していく中で、インターネット上だけではわからないことがたくさん出てきた。そんなときフェイスブックでAMPのアカウントを見つけ、電話をかけ直接お話を聞く機会をいただいた。

まずAMPがどのようにして誕生したのかを伺った。AMPが誕生したのは、100円商店街が誕生したのと同時期で、この企画がきっかけだという。最初は100円商店街などのイベントを行うたびに、有志を募って運営をしていた。しかし先ほどあげたような100円商店街以外のさまざまな活動も増えていく中で、毎回有志で募ったメンバーだけで運営していくことが困難になり、団体としてのAMPが誕生した。今では事務所を構えて5名のスタッフで

---

<sup>1</sup> NPO-AMP 特定非営利活動法人アンプ(最終閲覧 2014 年 7 月 7 日)<http://www.npo-amp.com/>

活動している。だが今でもイベントを行うたびに、地域の方々に声をかけ協力してもらっている。そういった地域住民とのつながりを大切にするのもAMPの特徴だ。

地域の人々との協力で最近行われたのが「椅子ワングランプリ」だ。このグランプリの元祖は京都の京田辺で、新庄市では昨年からはまった。駅前の商店街で行われたこの大会は、参加者が事務所などで使われている、くるくる回る椅子でレースを行うというものだった。全国から参加者が集まり、大会当日は多くの観光客でにぎわった。そのスタッフとして運営していたのがAMPである。AMPはこういったイベント時に、スタッフとして活躍し場を盛り上げる。

また6月28日には「新庄バル街」が行われた。これは飲み歩き、食べ歩きを楽しむイベントで新庄市中心街の31店舗で繰り広げられた。各店が儲けを度外視したメニューを用意し、普段よりお得に飲食をたのしんでもらおうと企画された。元々バル街は地域と飲食店の活性化、交流人口拡大を目的として、2004年に北海道の函館市ではまった。「バル街」と銘打ったイベントは県内初の試みで、各店へのリピーターを増やすことが狙いとされた。地域の人に喜んでもらうことができ、飲食店もこのイベントを通してリピーターを獲得できる。また地域住民以外にも、他県からの観光客の増加にもつながる。このような地域と密着した取り組みがAMPではさまざまなされていた。

私が現地調査に行くために帰省したのは6月14日だったが、その日はちょうど「山形デスティネーションキャンペーン」の初日だった。この「山形デスティネーションキャンペーン」とは地方自治体および観光事業者などがJRグループと連携して対象となるエリアについて観光素材の磨き上げと発掘を行い、それを期間中集中的に宣伝することにより、全国からの顧客を増やそうとする日本最大規模の観光キャンペーンである。「日本人の心のふるさと美しい山形」を実感できる滞在型の旅の提案の基本コンセプトと、「山形日和。」のキャッチコピーのもと、山形へ来てくれた人をあたたかくもてなすイベントだ。<sup>2</sup>

全産業が参加することで観光立県につなげたいと始まったこの県内初のキャンペーンの初日に帰省できたということもあって、新幹線の止まる各駅ではあたたかいおもてなしを見ることができた。

最初のおもてなしはなんと福島駅だった。駅のホームに到着すると、「山形日和。」のおおきな旗を持ったJR職員が笑顔で手を振っていた。このキャンペーンを知らなかった私は、福島駅で山形の宣伝をしている理由が初めは分からなかったが、職員の方々の笑顔を見てあたたかい気持ちになった。次の終着駅である米沢駅は私が短大で2年間過ごした思い出の場所だ。米沢駅に着くところでも「山形日和。」の旗を持った人々と、山形大学の花笠サークル「四面楚歌」の人々による花笠音頭が出迎えてくれた。どの人もみんな笑顔で心があたたかくなった。このように新幹線のとまるすべての駅で、あたたかいおもてなしがされていた。そして驚くことにこのキャンペーンは県内だけでなく、福島駅と仙台駅でも行われているようだった。近隣県に山形県をピーアールすることで、全国からの観光客を増やそうという狙いである。またワインが有名な高島では新幹線の中でワインをふるまったり、そばが特産品の村山では無料でそばをふるまったりした。スイカの名産地である大石田駅では、無料のスイカサイダーを配ったり演歌で歓迎したりと、心温まるおもてな

---

<sup>2</sup> 「多彩に、山形日和。」(2014年6月15日付山形新聞)

しが見られた。そして私の地元である新庄駅では、新庄まつり囃子の勇壮な音色が披露された。本合海囃子若連がお囃子を披露し、市内の保育園の園児たちは手作りの小旗を持って観光客を出迎えた。また最上郡のゆるキャラも勢ぞろいし、子どもたちを喜ばせていた。

どの駅でもJRグループと観光事業団体、また多くの地域住民が笑顔でその土地の名物をみせてくれる。県外から訪れた人は珍しそうに、また嬉しそうに写真を撮って人々と触れ合っていた。県外からの観光客はもちろんだが、私のように久しぶりに帰省した県民にとってもあたたかい出迎えがあるというのはとてもうれしいものだった。このキャンペーンは県外の人にとってはもちろん、地元にはあまり戻りたくないと考えている私と同じような世代の人にとっても効果があるのではないかと思った。<sup>3</sup>

#### 4. 新庄から全国へ

AMPが始めた100円商店街が、今では全国60を超える自治体に広がったという事は先ほど述べた。しかし単に100円商店街が広まっただけではなく、様々なところで、様々な形でそのつながりを見ることができる。

現地調査で新庄を訪れた際、駅に展示されてあったのが「プラレール」だ。プラレールとは青いプラスチックのレールの上を電車が走る、子どもに人気のおもちゃだ。このプラレールは100円商店街でつながった三重県の亀山市の「こまちプラレールクラブ」さんの協力で飾ることができたという。日本最大級のプラレールで、連日多くの家族連れや園児たちなどが訪れている。子どもたちは大きなプラレールに大興奮だった。

夏に行われる新庄市最大のイベントである新庄まつりでも、そのつながりを見ることができる。まつりが開かれる3日間は多くの「出店」が立ち並び人々を喜ばせている。その中には北海道のイカ焼きや、大阪の本場のたこ焼きなども出店されている。これらも100円商店街でつながったことがきっかけである。ふだんは味わうことができない本場の味を、新庄まつりで気軽に味わうことができるのもこうしたつながりのおかげだ。

新庄市が100円商店街を通して商店街を活性化させていったように、全国でも100円商店街を実施し活性化をした都市がいくつもある。たとえば東京都の奥多摩町や徳島県の阿波市、千葉県船橋市、奈良県生駒市、大阪府大阪市などである。これらの市は新庄市で始まった100円商店街を導入し、大成功させていった。また単にそのままねるだけでなく、その都市その都市で様々な工夫を凝らし、商店街をよみがえらせていった。<sup>4</sup>

このような都市との交流が今でも盛んに行われている。たとえば昨年行われた「全国100円商店街サミット」だ。昨年で2回目の開催となった。新庄市に全国の100円商店街の関係者が集い、サミットを行った。もっと商店街が活性化するためにはどうしたらよいかということを、彼らは日々追及している。またAMPも現地視察をかねて全国の100円商店街を訪問し、交流会を続けている。

このような長い時間の取り組みと全国とのつながりにより、新庄市は以前に比べ活気を取り戻していった。自分の知らないところで、今日も誰かが街を守るために活動している。

<sup>3</sup> お話を伺った NPO 法人 AMP スタッフ様(訪問日 2014 年 6 月 16 日)

<sup>4</sup> 中小企業庁：がんばる商店街 77 選：新庄南北本町商店街等(最終閲覧 2014 年 7 月 7 日)[http://www.chusho.meti.go.jp/shogyo/shogyo/shoutengai77sen/idea/2touhoku/2\\_touhoku\\_07.html](http://www.chusho.meti.go.jp/shogyo/shogyo/shoutengai77sen/idea/2touhoku/2_touhoku_07.html)

### 第1章—第3節

そういった人々のおかげで今の新庄市があるのだと思うと、とても感動した。2年後卒業して地元に戻ったら、今度は自分が街を守る側になる。新庄市がこれからもっと人々に愛される街になるように、私たちの次の世代にとっても誇れる街であるように、自分も新庄市に住む一住民としてこれからも新庄市について考えていきたい。